

アバン

撫子「アニメ偽物語 Blu-ray or DVD 第一巻かれんビー（上）、お買い上げ誠にありがとうございますと書いています。撫子は、この第一巻の裏声を担当させていただきます、千石撫子と言います」

月火「何それ。え、NADEKOだYOーって 入るんでしょ？」

撫子「ち、違う！ あれは何かの間違い！」

月火「この裏声を聞いてくれる人はみんな DJ・NADEKO を期待してるんだよ？ 撫子ちゃんは、その期待を裏切るの？」

撫子「う、裏切るなんてつもりは……でも、でも」

月火「裏切り者なの？」

撫子「裏切り者って……な、なんでそこまで言われなきゃいけないの？ DJ・NADEKO のキャラを捨てたくらいで……捨てるも何も、そんなキャラは元々いなかったんだよ？」

月火「いるの。公式サイトでの登場人物紹介ページに載ってたもん」

撫子「載ってたの!？」

月火「DJ・NADEKO、さすらいの中学生 DJ。町内のクラブにふらりと現れては、お皿を回して去っていく」

撫子「その言い方だと大道芸人なんだけど……町内にクラブはないし」

月火「あるもん！ 私よく行ってるもん」

撫子「行ってるの!？ さすが月火ちゃん、大人！」

月火「毎朝通ってるもん」

撫子「あれあれ？ 嘘っぽくなったよ？」

月火「ヒアウィーゴーでチャコラ！」

撫子「チャコラ!？ つ、付け焼き刃っぽい……」

月火「とにかくやり直し、DJ・NADEKO が入って。私にも段取りというものがあるんだから、話の流れを壊しちゃダメ」

撫子「月火ちゃん怖いよ、気合い入りすぎだよ……」

月火「何？ いや、よく知らないけどさあ、伝え聞いたところじゃ撫子ちゃん、なんか人気あるらしいじゃない？」

撫子「め、めめめ滅相もないです！」

月火「つまり人気があるから、そういう DJ・NADEKO みたいなことはできない、って言ってるのかなあ？ そんな汚れ仕事はお前がやれと、私に命令しているのかなあ？」

撫子「あらぬ誤解です。……わ、わかったよお、やるよお……でもさすがに、一時間通してあのキャラは無理だよ？」

月火「うん、冒頭だけでいい。もちろん、撫子ちゃん一人にやらせたりはしないよ？ ほら、私たち、仲よし中二コンビなんだから」

撫子「そ、そうかなあ……」

月火「じゃあ名乗ってよ、DJ・NADEKO、その後は、アドリブで私が合わせていくから」

撫子「ブラザー月火になってくれるの？」

月火「なるなる。なるっていうか、元々私はブラザー月火だもん。お兄ちゃんはだから、大ブラザーって呼ばれてるもん。なんて、お兄ちゃんほっこいんだけどね」

撫子「こ、曆お兄ちゃんはちっこくないよ！」

月火「そのうち私、お兄ちゃんの身長を追い抜くと思う。お兄ちゃん今、私のことをちっちゃい方の妹とか呼んでるけど、そのうち私が、お兄ちゃんを、人間のちっちゃいお兄ちゃんと呼ぶようになってくるの」

撫子「それちっちゃいの意味合いが違うんじゃないかなあ」

月火「そうだね。人間のちっちゃいお兄ちゃんなら今でも呼べるもんね。やーいやーい、人間のちっちゃいお兄ちゃんやーい。……はあすつきりした」

撫子「……暦お兄ちゃん、これ聞くんじやないのかな」

月火「聞かない聞かない。お兄ちゃん受験勉強で忙しいんだから。さ、仕切り直すよ？」

撫子「NADEKOだYOー。アニメ偽物語第一巻かれんビー(上)Blur-ray or DVD`お買い上げリスパクトだYOー。愛する両親、共に歩んで来た仲間、そしてお前に感謝、HOー！ 撫子のライブに1時間、存分にYOー。って言うてくれYOー！ じゃあ！ 撫子の愉快なバディを紹介するよ？ ブラザーTSUKIHIT、カモンー！」
月火「こんにちは。梅の木第二中学校二年生、阿良々木月火です。撫子ちゃんと一緒に裏音を担当させていただけます。拙いおしゃべりではございますが、1時間どうぞお付き合ってください」

撫子「梯子をはずされたYOー！」

月火「いや、ごめん無理だった。撫子ちゃん、そんな恥ずかしいことを友達に強要しないでよ」

撫子「な、撫子だって恥ずかしいYOー！ じゃない、恥ずかしいよお……」

月火「でも、思いの外ノリノリだったじゃない」

撫子「うええ……確かに、ちよつとやりすぎたかも……」

月火「つまり、撫子ちゃんが悪いの。私悪くないの。私性善説」

撫子「え、ええ……月火ちゃん今好感度だだ下がり中だよ？」

月火「いやーだってさあ、私の身にもなってよ撫子ちゃん。撫子ちゃんくらいの人気者と、二人でペアを組んでコメントリーをしなくちゃいけないって、かなりのプレッシャーじゃない？ ちよつとでも私が失言をしたら、『うわー撫子ちゃんにひどいこと言ったー』とか、『撫子ちゃんがかわいそう』とか、『撫子ちゃんをいじめた！』とか、そういう非難囂々、批判的になっちゃうことがもう目に見えているわけじゃない？」

撫子「今のは全部、僅か四分の間に起きた事実じゃ……」

月火「だから私は割り切ったの。気にしない。むしろ積極的に、撫子ちゃんを攻撃していいこうと」

撫子「なんでそんな結論になっちゃったの!？」

月火「この裏音声の収録中に、私は撫子ちゃんを倒します！」

撫子「た、倒すって……月火ちゃん、撫子に何をやる気なの!？」

月火「さあ何をする気かな……うふふふ。撫子ちゃん、逃げるなら今のうちだよ？ この収録現場から帰るなら今しかないよ」

撫子「はいわかりました。じゃあ」

月火「なんで帰るの!？ 友達を置いて帰るの!？ つめたい、撫子ちゃんつめたい！」

撫子「攻撃って、そういう陰湿な攻撃なんだ……」

月火「仲よし中二コンビいえーい！」

撫子「いえーい……ていうか、月火ちゃん、そんなこと気にしなくてもいいじゃない。だって、撫子より月火ちゃんの方がよっぽど人気者じゃない」

月火「誰が走る正直者よ」

撫子「いや、正直者じゃなくて人気者、月火ちゃんは嘘つきじゃないの」

月火「軽いボケにひどいツッコミ入れるね、撫子ちゃん」

撫子「小学校のときのニックネーム、『うそつきひ』だったじゃない」

月火「やめろー！ お兄ちゃんも知らない私の昔のあだ名をバラすなー！」

撫子「その名前で呼んだ男子は、ただでは済まなかったけれどね……」

月火「ただで済まなかった男子なんていません。みんな私のことを『らちちゃん』と呼んでいました。そう、私は人気者でした。走れ正直者じゃなくて、おらは人気者って言うつもりだったのです」

撫子「そんなこと言うつもりだったんだ……でも、うん！ 今だってファイヤーシスターズって言って、中学生の星じゃない。だから、撫子とときにつつかかる必要はないんだよ」

月火「撫子ごときだなんて、またそんな人心をくすぐるようなこと言っちゃって」

撫子「人心をくすぐるって……そんな悪意のある表現をしなくても」

月火「悪意なんてないよ。あるのは嫉妬だけだよ？ ああ妬ましい、おのれ千石撫子、この恨み晴らさでおくべきか！」

撫子「なんで浦見魔太郎みたいに……？ 恨みは買ってないはずだよ？」

月火「人のお兄ちゃんを唇お兄ちゃんとか呼ぶな！」

撫子「怒ってるのそこなんだ」

月火「あー叫んですつきりした」

OP

月火「さ、そろそろ本格的に始めようかな、浦見魔太郎だけに裏音を」

撫子「うっふふはは」

月火「ウケちゃった。こんなジョークが！？」

撫子「ちよ、ちよとごめん、水飲む」

月火「は……いいけど、あんまり簡単なギャグでウケないでね？」

撫子「頑張る」

月火「裏音声とは何か、ってことをまずは説明しておいた方がいいのかなあ」

撫子「そうだね」

月火「光あるところに影があるように、世の中、どんな話にも裏があります。この偽物語という物語にも語られることのない裏の物語が……」

撫子「ち、違うよ！？ そんな壮大なスピノフとかそういうものじゃないよ？」

月火「パーマンに対するドラえもんじゃないんだ」

撫子「ドラえもんはパーマンのスピノフじゃないよ！」

月火「じゃあなんなんだろう、裏音声。お兄ちゃんに言われるがままに引き受けちゃったけど」

撫子「唇お兄ちゃんに言われたんだ……じゃ絶対これ聞いているじゃない唇お兄ちゃん。わからないまま引き受けちゃったの？」

月火「響きがかっこよかったんだもん、裏音声。表には出ない裏の音声。私でなくとも言われるがままに引き受けるよ！ でも、よく考えたら裏って言葉中二っぽいよね？」

撫子「中二って、撫子たちが中二だけ……」

月火「仲よし中二コンビいえーい！」

撫子「そんなに誤魔化せてないと思うよ……」

月火「で、裏音声って何？ 説明してよ撫子ちゃん」

撫子「だから、Blu-ray or DVDの特典としての副音声を、通常一つのところを、第一巻発売記念で二つ収録しちゃおうってサービスタッチ」

月火「なでこサービス！」

撫子「裏音声に変な名前をつけないで……だから、一つ目の副音声に対する二つ目の副音声が、裏音声なんだって」

Aパート

月火「ふーん。つまり私たちは二番手だと」

撫子「嫉妬心の固まりだね、月火ちゃん」

月火「じゃあお届けしましょうか、肅々と。二番手の副音声をね」

撫子「そのテンションでずっとお届けするの？」

月火「いえいえ、二番手ながら頑張らせていただきますよ。一番手のお歴々の邪魔にならない程度にね」

撫子「怖いよー……」

月火「あれ？ お兄ちゃんがテレビに出てる！ なにこれ！？」

撫子「えー！ 何その新鮮なリアクション」

月火「あ……ああー。これそういう企画？」

撫子「そういう企画って、今までどういう企画だと思ってたの？」

月火「うん？ これずっと、さつきから私の家だったの？ 撫子ちゃんと遊ぶのに必死で、全然この画面見てなかったんだけど」

撫子「撫子も月火ちゃんに遊ばれるのに必死で、全然見れてなかったけど……巻き戻して最初からやる？」

月火「いいんじゃない？ どうせそこまで期待されていない企画なんでございませうから、二番手は二番手らしく、分を弁えた仕事をしましょう。言ってしまうえば、巻き戻しボタンを押すような手間をもらえる身分じゃないわけじゃない？ 私たちは」

撫子「嫉妬がいきすぎて卑屈になってきた……」

月火「卑屈って言葉はもう、言葉の響きが卑屈だね。なんだろう、昔の人はよく考えたよね、こんな私たちに
お似合いの言葉を」

撫子「元氣出していこう！ 月火ちゃん！」

月火「撫子ちゃんから励まされる日がくるなんて……！ よし、頑張ろう」

撫子「頑張ろう！」

月火「二番手は二番手なりに頑張ろう」

撫子「……でも、火憐さんも来ればよかったのにね」

月火「この場に？」

撫子「うん。やっぱり主役はファイヤーシスターズなんだから、撫子なんかじゃなくて、火憐さんと月火ちゃん
でお届けすればよかったのに……火憐だぜー！」

月火「月火だよ！ ……懐かしいなこのノリ」

撫子「うーん、月火ちゃんのお家広いよね」

月火「え？ 私がヒロインだったって？」

撫子「そんなことは言っていないよ。主役とは言ったけども。広いよね、月火ちゃんのお家」

月火「ふうむ。確かにリビングで野球ができるけど」

撫子「それは無理だよ。そういえばそうだったけどみたいな感じで嘘をつかないでよ、月火ちゃん」

月火「あ、間違えた。野球じゃなくて野球拳だった」

撫子「え、だ、誰と？ どなたとですか？」

月火「私が野球拳をする相手がお兄ちゃん以外にいるわけじゃないじゃん」

撫子「はうあぁ！」

月火「厳密に言うと、お兄ちゃんに野球拳を強要されたんだけどね。あはははっ」

撫子「笑えないよ……。え、冗談だよ、暦お兄ちゃんは大人だから、そんなそんなことしないよ月火ちゃん」

月火「ソウダネー、シナイネー」

撫子「リビングでしているのは喧嘩じゃないの？」

月火「これは喧嘩じゃないの。言ってるでしょ？ これはコミュニケーション。いえ、もうこれはコミュニケーション
ションどころじゃないね。コミュニケーションと言うべきだね」

撫子「え、『ミュ』を増やしたらコミュニケーションがより深いことになるの？ そんなの初めて聞いたけど……。待って！ 今曆お兄ちゃんが私の名前を呼んだような気がするよ！」

月火「おっとばれたか。実はね、これはお兄ちゃんが、撫子ちゃんのとこに電話するの凶なんだよ。忍者ハックトリくん風に言うなら、『お兄ちゃんが、撫子ちゃんのとこに電話するの巻』なんだよ」

撫子「ケムマキなんだね。いやいやそうじゃなくて」

月火「あ、そうだ。解説しとかないといけないじゃない」

撫子「ん？ 解説？」

月火「何やつてるの撫子ちゃん、なんでこんな大切なことを忘れるの？ こんなMOC失格だよ！？」

撫子「な、なんの件で責められてるのかわからないけど……」

月火「ほら、このアニメの時期から時間が経つちやって、私たちの仲も深まつてるじゃない？ だから、お互いの呼び名って、この頃から変わつてるじゃないの。それを説明しないと、視聴者の皆様混乱しちゃうよ？」

撫子「ああ、そうだね。それで撫子が怒られる理由はわからないけれど……。そうだね、この頃は、撫子は月火ちゃんのことを『らちちゃん』、月火ちゃんは撫子のことを『せんちゃん』て呼んでたんだよ」

月火「ああ、もう！ 撫子ちゃんの面倒は見切れないよ！」

撫子「確かに見切れてない気がする」

月火「まあ、時間が経つとどうしても、互いの呼び方も変わっていくよね。お兄ちゃんだってね、今では『でっかい方の妹』とか『ちっちゃい方の妹』とか呼んでるけれど、昔は私たちのことをかわいく呼んでいた頃もあるんだよ。その件を持ち出すと、本気で怒るから言わないけど。らちちゃんって、あれ小学生の頃のニックネームなんだよね。今私のことをらちちゃんなんて呼ぶ友達なんていないもの」

撫子「だよ」

月火「『阿良々木月火』の『らら』を取って『らちちゃん』。なぜ真ん中を取った！ って今だったら言えるけど、もつと考えて欲しいなー」

撫子「『うそつきひ』は考えられていると思うよ」

月火「だから『うそつきひ』などというニックネームで呼ばれたことはありません」

撫子「そうですか……」

月火「『うそつかないひ』だったら呼ばれたことがあったかも」

撫子「ではうそつかないひちゃん」

月火「思い出しました。そんなニックネームで呼ばれたことはありませんでした」

撫子「だよ。撫子も知らないもん」

月火「で、撫子ちゃんは『千石』の『せん』を取って『せんちゃん』だったんだよ。ふうむ、まあ、特にここみどころのないニックネームかな。ノーセンスすぎるよ、小学生といえど。そのニックネームをつけたやつに、私は撫子ちゃんの友達として、文句を言ってあげたいね！」

撫子「月火ちゃんがつけてくれたの」

月火「え？ 嘘でしょ？ 私？」

撫子「いや、月火ちゃん、言ったらなんだけど、当時の月火ちゃんのニックネームのつけ方、大体そんな感じだったよ」

月火「シンプルイズ私」

撫子「月火ちゃんのニックネームは当時らちちゃんだったのは、つまり、真ん中の二文字をとるという変わったことをされたのは、だからなんじゃないのかな。考えがなかったわけじゃなくて、みんなからの隠されたメッセージだったんじゃないのかな」

月火「なにより、言ってくれればいいのに」

撫子「言ったら月火ちゃん怒るんだもん。こーんな顔でニックネームつけてくれてるのに、それを否定したら」

月火「うわ、小学生女子の得意顔、腹立たしい。音声だからお届けできないのが残念。それを撫子ちゃんがやっているというこの例を独り占めだけのできでも、今日はここに来た甲斐があったね」

撫子「だけのできでも？」

月火「だけのできでもだよ。何も間違えてない。でもそうか、私そんな小学生だったのかー。そっかー、それを思うと私も随分成長したものだね、よかったよかった」

撫子「世の中にそんなまとめ方があるの？」

月火「あれ？ ここどこ？」

撫子「あれ？ Aパート終わる？」

Bパート

月火「はい、アニメ偽物語第一巻かれんビー（上）Blu-ray or DVD 裏音声、阿良々木月火と千石撫子でお送りしておりますけれども、ここから第一話、かれんビー其の巻のBパートに入ります。張り切ってまいりましょう」

撫子「ダメだよダメだよ。そんな元氣澀刺でもごまかせてないよ！ 撫子たちがろくにしゃべらないままAパートを終えてしまったことをごまかせてないよ！」

月火「撫子たちって何よ。二人の責任みたいに言わないでよ」

撫子「ふ、二人の責任だと思っただけ」

月火「いや！ 私の責任だね。全部私の責任、私一人の責任。撫子ちゃんは何も悪くない、私がいけないの！」

撫子「月火ちゃんが好感度を上げにかかった！」

月火「私が撫子ちゃんにちゃんと注意しなかったのがいけないの。はあ、なんで私はあるとき撫子ちゃんの失敗を見越して忠告してあげることができなかったんだろう！」

撫子「その論法って本人が思ってるほど責任を回避できてないよ」

月火「部下の暴走の責任は、上司の責任。部下を掌握できなかった私のせいだよ。ここまで裏音声をちゃんと進行できなかったのは」

撫子「撫子、月火ちゃんの部下なの？ 友達じゃなくて……？」

月火「友達！ いえーい！」

撫子「い、いえーい」

月火「仲よし中二コンビいえーい！」

撫子「いえーい……ほ、本当に仲よしなのかな……」

月火「え！？ 仲よしだよ、仲よしに決まってるじゃん。なんでそんなこと言うの？ 違う！ 私うざくない、うざくない！」

撫子「地雷を踏んでしまった……？」

月火「うーん、ていうか私たち、裏音声をお届けする上でここまで基本画面を見ていないからね。いつの間に私の出番は終わったのかな。お互いに話すときは、お互いの顔を見て話してる感じになってるから、それが問題なんじゃないのかな」

撫子「撫子は月火ちゃんの顔さえ見ていないけど」

月火「え？ あ、ああ……前髪でね、びっくりしたあ。すごい嫌われてるのかと思った。顔も見たくないって正面から言われてるかと思った」

撫子「どんなトラウマがあるの、人気者の月火ちゃんの人生に……」

月火「どうも慣れないなあ。撫子ちゃんは前作で、副音声をやったことがあるんだよね。前作の、どっかの、なんかのときに、誰か、パートナーと一緒にだったか、一人だったかでやったんだよね」

撫子「そんな角度の低い情報がある！？ 撫子の実在が疑われるよ……」

月火「そのときもこんな感じだったの？」

撫子「そのときは、なんていうのかな、だから、一緒にやってくれた人が導いてくれたから、もうちよつと撫子も画面を見ていたはずだよ」

月火「ふうむ。パートナーだかなんだかわからない人が導いてくれた」

撫子「だから、そんなに角度の低い人じゃなくって……大人のね、アロハ服の、男で」

月火「チッ、なんだ、男の話か」

撫子「えー何そのリアクション」

月火「撫子ちゃんは今、男と一緒にだったらうまくできた、って言ったんだよ。そんなこと言われたら月火ちゃんは傷つくじゃない！舌打ちだっけしたくもなるじゃない。はっ、舌打ちだっけしたくもなるってギャグみたいになっちゃった。仕方ない、こう付け加えてフォロースhow舌打ちだけにね！」

撫子「フォロースhowとしなければそこまで傷口は広がらなかったんじゃ……月火ちゃん、なんでそんなめんどくさい性格になってるの？」

月火「めんどくさい性格とか言わないで」

撫子「どうしたの？ 今日何かあったの？」

月火「いや、やっぱり撫子ちゃんは、お兄ちゃんと一緒にやりたかったんじゃないのかなー、と思うと、そういうところでも、私は拗ねちゃうわけだよ。私をお兄ちゃんの代役だと思われていると思うと、そりゃ態度も悪くなるよねちねちね言いたくなるよ！」

撫子「理由はわかったけど、どっちみち印象はよくないよね。ご、誤解だよ月火ちゃん……撫子は嬉しいんだよ。

月火ちゃんと一緒に、こうして副音声をお送りできることが。あつ、副音声じゃなくて、裏音声だけど、そんなの全然気にならないよ。月火ちゃんと一緒に何かできるっていうだけで、撫子はもうそれだけで嬉しいの」

月火「本当？」

撫子「ほんとほんと。嘘だったら、今日は裸になってブルマだけで帰るよ」

月火「そこまで過酷な罰ゲームを強いる気は私にはないよ。え？ 撫子ちゃんブルマって何？」

撫子「ほら、こういうのだよ。見てみて」

月火「何これ。パンツじゃん。厚手の生地のパantsじゃん！」

撫子「今日は裏声を録るんだよ、ってある人に話したら『じゃあこれをお守りに持っていけばいい』と貸してくれたんだ」

月火「ある人って誰？」

撫子「年下のマレスターの肩書きを持つ人だよ」

月火「マレスターって……虐待者みたいな意味合いじゃなかったっけ」

撫子「間違えた。マイスターだった」

月火「まあ訂正したところでどっちみちいい響きにはならないけれど」

撫子「いい響きにはならないかもしれないけれど、いい人だよ」

月火「何よ庇うじゃない！ ふーんだ！ だったらその人と一緒に裏声をやればいいじゃない！ こんな傷つけられるとは思わなかった！ 私もう帰る！」

撫子「繊細すぎる……」

月火「裸にブルマだけで帰る！」

撫子「やけにならないで！」

月火「でも正直なところ、どうなの月火ちゃん」

撫子「月火ちゃん？」

月火「あー違った、言い間違えた。でも正直なところどうなの、撫子ちゃん？」

撫子「相手の名前と自分の名前を言い間違えるなんてことがあっていいの？」

月火「ほんとはお兄ちゃんとやりたかったんじゃないの？ この裏音声だか、なんだか言うらしい何かっぽい何かを」

撫子「どれだけ裏音声という名称が気に入らないの月火ちゃん」

月火「どうなの？ 本当に、撫子ちゃんが唇お兄ちゃんとやりたい、って言うのであれば、今から私本当に帰ってもいいんだよ」

撫子「裸にブルマだけで？」

月火「いや違うけど。唇お兄ちゃんに電話して、『お兄ちゃんに言われるがままに来てみたものの、どうもこの現場は私の手には負えないみたいだからやっぱり代わってくれる？』ってお願いしてあげてもいいんだよ？」

撫子「う、うう……」

月火「どう？ あと五秒以内に決めて」

撫子「なんでそんなに短い！？」

月火「何言ってるの撫子ちゃん、五秒ってというのは結構な長……あ、もう経っちゃったかな」

撫子「ううー」

月火『「ううー」じゃないよ。いや、かわいいけど」

撫子「か、かわいいって言わないで……」

月火「いやびっくりしたー。短いね、五秒。お兄ちゃんだったら、五秒あったら妹を裸にできるけどね」

撫子「え！？ なんて！？」

月火「どうする？ お兄ちゃんと私、チェンジできるんだよ？ 五秒は過ぎたけど、まあロスタイムということであ」

撫子「ロスタイム長」

月火「撫子ちゃんのために、ロサンゼルス時間設定であげただから感謝してよね」

撫子「なんだろう、言葉に偽りはないんだろうけれど、想像以上に感じが悪い。……さておきえつとね、月火ちゃん、唇お兄ちゃんは呼ばなくていいよ」

月火「ふむ。その心は？」

撫子「だって、唇お兄ちゃんと一緒に、二人きりで収録するなんて、すっごく恥ずかしいじゃない？ ただでさえあがり症な撫子なのに、一言もしゃべれなくなるよ」

月火「ふうん」

撫子「コメントリーでしゃべれなくなっちゃダメじゃない。だから、撫子には月火ちゃんくらいがちょうどいいんだよ」

月火「今なんだった！？」

撫子「うわあ」

月火『「月火ちゃんくらいがちょうどいい」ってどういう言い種だー！」

撫子「し、しまった。失言だ」

月火「失言も失言、失言すぎるだろ！ お前は日本最大の湿原、釧路湿原か！」

撫子「怒りすぎて何を言っているのかわからないよ」

月火「いや日本最大どころじゃない、世界最大の湿原……う、うーん……」

撫子「あ、世界最大の湿原を知らないみたい」

月火「うーん……ま、まあいいとしよう。えーっと」

撫子「罵倒のセリフを思いつかなかったという理由で怒りが冷めた……ピーキーすぎるよ月火ちゃん」

月火「じゃいいんだね、私で」

撫子「う、うん！ 月火ちゃんがいい。月火ちゃんが最高！」

月火「え？ ごめんよく聞こえなかった、もう一回言ってくれる？」

撫子「月火ちゃんが最高！」

月火「あーごめんもう一回かなあ」

撫子「月火ちゃんが最高！ 月火ちゃんがかわいい！ 月火ちゃんが素敵！」

月火「私とやりたい？」

撫子「やりたいやりたい。むしろ、月火ちゃん以外とはやりたくないくらいだよ」

月火「そこまで言われちゃうと断れないなあ。そこまで言われて断ったら女が廢るといふものよ。オッケー、やりましょ。お兄ちゃん呼ばない」

撫子「うん！ ……ほっ、やっこの話が終わったよ」

月火「けどさー撫子ちゃん、私は撫子ちゃんのそういうところが一番嫌いなんだよ」

撫子「びくうっ！」

月火「なんでここで『暦お兄ちゃんを呼んで』って言えないのか。撫子ちゃんのそういうところがイライラする
と、私は言ってるんだね」

撫子「ちよ、ちよっ、月火ちゃん、あの、ここでそういう話は……」

月火「でも撫子ちゃん、自分の性格に問題がある、っていうことはちゃんと認識しなきゃダメだよ？ 私みたい
に、問題のない人間なんてそうはいないんだから、まず撫子ちゃんには、『自分は月火ちゃんじゃない
だ』ってことを認識して欲しい」

撫子「それは認識してるつもりだけど……」

月火「あれ？ なんでこんな話になってるんだっけ？ 別に撫子ちゃんの人格的な問題を糾弾するつもりじゃな
かったんだけど」

撫子「つもりじゃないのにあそこまで言うなら、つもりだったらどれくらいのことを言われるんだろう……」

月火「あ、そっかあ、思い出した思い出した。『撫子ちゃんは、前作の副音声、どんな風にやったの？』って聞き
たかったんだ。やったのは、第四巻だっけ？」

撫子「うん。厳密に言うとなね、第五巻でもやったの。そっちは、三話収録されているうちの二話だけけど」

月火「そっちも、年上の男と？」

撫子「その言い方……違うよ、そっちは年上の女のひと。とってもいい人だったんだよ」

月火「だったらその人とやればいいじゃん！ 今からメールしてその人呼んでくればいいじゃん！」

撫子「蒸し返しだよ……嘘、今までのくんだり一からやり直しなの……？」

月火「きいー！」

撫子「『きいー』って」

月火「ぶんぶん！」

撫子「そんな温和な怒り方じゃないよね。でも、なんかいいなあ月火ちゃん、そんな風に自由に怒れて。なんで
そんなすぐに怒れるの？」

月火「褒められてるのかな」

撫子「もちろん褒めてるんだよ。今、撫子の名前は撫子じゃなくて褒子だよ」

月火「ホメオスタシスみたいだね」

撫子「え？」

月火「あーごめん、流して。なんとなく、古代の哲学者みたいな気持ちで言ったけれど、よく考えたらホメオス
タシスって人名じゃなかった」

撫子「とにかく、撫子みたいな子からしたら、ちゃんと自分の感情を表に出せる、自分を主調できる月火ちゃん
が羨ましい、ってことだよ」

月火「うん、なるほど、くるしゅうない！」

撫子「また古風な」

月火「『裏音声』の『裏』は、『裏街道』の『裏』ではなく、『羨ましい』の『うら』だと、撫子ちゃんは言いたいんだね？ そうかそうかくるしゆうない！」

撫子「馬鹿なのかな、月火ちゃんはひよっとして」

月火「何か言った？」

撫子「何一つ述べてないです！ 仲よし中二コンビいえーい！」

月火「いえーい！」

撫子「一応確認しておくけれど、月火ちゃんってファイヤーシスターズの参謀担当でいいんだよね？」

月火「もちろん。お賢いよ私はー」

撫子「うん。話を撫子が戻すけれど、つまり、月火ちゃんが私に聞きたかったのは、どうすれば副音声を、私たちの場合は裏音声だけど、とにかく、コメンタリーを、きちんとお届けできるのかってことなんだよね？」

月火「そう。どんな風にやったかっていうのを教えてもらわないことには、いくらお賢い私といえど、お手上げですよ」

撫子「結構簡単にお手上げするんだね」

月火「腋を見せるポーズ、セクシー！」

撫子「うーん、でもあのととき、撫子はリードしてもらっていた立場だから、どっちのときでも、撫子が拙くしゃべっているのを、うまくフォローしてくれてたって感じで」

月火「それかー」

撫子「え？ 今の話で何か掴めたの？ 何か掴めたんだとすれば月火ちゃん、本当にお賢いけど」

月火「つまり、私が撫子ちゃんをフォローしながらしゃべれば、うまくいくってことでしょ？ 私にはこれまでその心掛けが足りなかったんだ。面倒を見るってことじゃなくて、フォローするってことだったんだ」

撫子「結局撫子のせいみたいになっちゃった」

月火「大丈夫だよ。安心して撫子ちゃん、ここから先は、私が撫子ちゃんをアシストするから。よし、なんの問題もなくなった。もう撫子ちゃん、そういうことは早く言ってよね」

撫子「全部の責任を撫子が負わされた」

月火「おかしいとは思ったんだよ。なんでこの私がやってるのに、こんなうまくいかないのかなーって。そうだったのかー、ロールが違ったんだ。そういうローカルルールがあるって教えてくれたら、最初からうまくいったのに。まあ、ここから取り戻していこう。さあ、今画面はどんな場面かな？ 画面イズ場面！」

ED

撫子「あれ？」

月火「ん？ 何このV」

撫子「どういう場面なんだろうね」

月火「推測するに……そうだね、おそらくこれはね……ん、あ、わかった、わかっちゃった。これ月火ちゃんピーンと来ちゃったよ？ 私でよかった。裏音声を担当しているのが私で本当によかった。私じゃなかったら今何が起こっているか、わからないもん。危ないところだったねー、ギリギリセーフまだ挽回できるよ！」

撫子「それだけ振りが長いと、よっぱどのことを言わないと挽回できない気がするけど、大丈夫月火ちゃん、ちやんとおもしろいこと考えてる……？」

月火「これはエンディングテーマだね！」

撫子「あー……」

月火「私にすっかりしないで。いい？ 私にすっかりしてご覧なさい」

撫子「何キャラ？」

月火「私にすっかりしてご覧なさい？ 私が傷つくよ」

撫子「はい、わかりました」

月火「だから話を合わせないで！ 私に迎合しないで！」

撫子「どうするのが正解なの？ 月火ちゃんと付き合う上では」

月火「いやー、まさかBパートまで終わるとは。Bパートでお兄ちゃん一体何をやってたんだろう。誰とどんな話をしてたんだろうね。火憐ちゃん出てきたかな」

撫子「さあ。暦お兄ちゃんも撫子の家に到着してたかな。撫子、暦お兄ちゃんをちゃんとお出迎えできたかな」
月火「いやあ、またちよつと気分が沈んできちゃった。私これ、この後家に帰ったらお兄ちゃんに怒られるんだなーって思うとすっごくブルー。あーブルーだ来なきやよかった。撫子ちゃんのために来たけれど、撫子ちゃん私に全然感謝しないんだもんなあ」

撫子「今のところ、月火ちゃんに対して感謝する理由が、一つもないんだけど」

月火「はーあ、撫子ちゃんに感謝されたいなあ」

撫子「何その欲求」

予告

月火「いーい！ NADEKOだYOー！」

撫子「なんなのかなあ、月火ちゃんって」

月火「私を正体不明の生物みたいに言わないで。『なんなのかなあ』って」

撫子「宇宙人と会話する方がまだわかりあえそう」

月火「そこまで言われる？ しかも撫子ちゃんに？」

撫子「もう二話に入っちゃうね。うん、でも、予告の内容からすると、そうだね、撫子の登場は二話だね」

月火「家の中だけど、庭」

撫子「うふふははは」

月火「何言っても笑うなあ、この子は。じゃあ、ようやくエンジンもあつまって来たし、二話から本気出して行こうか！」

撫子「今更感が漂うYOー！」